

二〇二二年度A

小論文 (60分)

受験番号		

△注意▽

- 一、開始のチャイムが鳴るまで、中を開いてはいけません。
- 二、小論文用紙は、2枚配布されます。どちらか1枚を提出しなさい。
- 三、提出する小論文用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入しなさい。
- 四、提出する小論文用紙の冒頭にある所定欄に、○印を付けなさい。

【問】傍線部「都市にはいたるところ壁がある。」とありますが、どういうことですか。本文の内容をふまえて説明してください。また、「壁」に対する筆者の見解をふまえて、あなたの考えを述べてください。なお、字数は六〇〇字とします。 【時間六〇分】

都市にはいたるところ壁がある。建物は壁で囲われ、内部に入っても空間が壁で仕切られている。大きな会社だと〇〇課の壁。集合住宅だと、まずは各家族を鉄の扉で隔て、その内部も個室や浴室や寝室と壁で仕切られている。

壁はその内部でなされる（べき）ことを限定する。つまり壁は機能で空間を仕切り、その機能が効果的に果たせるような仕様にする。ここで人びとはいわば制服を着て活動している。ということは、期待される機能以外のことをしにくいということでもある。これでは新しい発想やイノベーションなんて起こりっこないと、チャレンジを謳う企業は、仕切りのない新しい空間の設計にさまざまに取り組んできた。

以前勤めていた大学で新しい研究・教育センターを開設するにあたって、研究室と事務室の壁を取り払い、さらに研究室も壁を肩からの高さのパーティションに取り換えたところ、人の流れがずいぶん変わった。ついでに職員の服装まで変化が起きた。そんな憶えもあって、二〇一三年から館長を務める《せんだいメディアテーク》でも、職員の席の一角で、おなじ仕様のデスクで執務している。常勤ではないので、留守中に起こったであろう細々とした問題がみなの様子からそれとなくうかがえる。

伊東豊雄さんが設計したこの七階建ての建物には垂直の大きな柱はなく、総ガラスの外壁越しに眺めると、多数の細いパイプで斜めに編まれた建物の支柱がまるで海中でゆらめく巨大な海藻のように見える。そして内部はといえば、倉庫や機材運搬用のエレベーター、トイレを除けばほとんど壁がない。事務局にもない。だから執務中も利用者の様子が手にとるようにわかる。逆もまたしかり。スタッフの仕事ぶりも丸見えである。

施設側からすれば、ゾーニングしないと「管理しにくい」という面はある。が、それをしのぐ効果をこの壁の不在はもたらす。たとえば、隣の活動が聞くともなく聞こえてくる。自由席のテーブルで受験勉強をしている高校生は、一方でカウンターでの騒ぎから、大人たちはこんな口調でクレームをつけるんだと驚き、他方では隣の哲学カフェでの議論から、世の中にはこんな問題もあるのだとあらためて知る。りっぱに「社会勉強」をしているのだ。併置されたカフェで軽食をとっている人なら、オープンスクエアでやっているワークショップにふと関心もち、帰りにしばらく立ち見席で耳を傾ける。それが「社会参加」のきっかけになりもする。じぶんの関心の〈外〉にあるものに、思わずふれてしまうということが起こるのだ。

壁は見える壁にかぎらない。社会に「ガラスの天井」があるように、人にはじぶんで造っている「見えない壁」もある。たとえば電車のなかで化粧やスマホに没頭している人は、たぶん「まわりをないことに」している。メディアテークではむしろ逆のことが起こっている。ないとおもってきたその「まわり」をとっさに感じてしまうこと。「見て見ないふりをする」というのとまさに逆のことだ。

高度化したメディア社会では、新聞やテレビといったマスメディアだけでなく、ツイッターやフェイスブックなどを使う一人ひとりが、メディア（情報媒体）になりうるし、またそうと気づかずにメディアになってしまっている。その一人ひとりがじぶんが活動している〈場〉を自覚的に開きなおすためには、こういう関心の溢れだしの体験が、そしてそれをうながす工夫が、不可欠だとおもう。